

アマダイの北米紀行

(序) 充電器忘れ、メール出来ず

白い山々に囲まれた、古城を思わせるバンフ最古、最高級のバンフスプリングホテルに荷を解き、携帯電話の充電コードを忘れたことに気付く。とりあえず発信するも国際ローミングもつながらず、その内電池が切れてアウト。ラスベガス、カナディアンロッキー、ナイアガラ瀑布を巡りトロントから帰り、成田で充電器をもう一つ増やしてしまう。この頃は見たまま感じたままをその場で携帯に打ち込み、事務所のパソコンにメール、帰国後編集する。帰国後に記憶を辿って書くのでは北米漫泳紀も中々筆が進まない。

①地球温暖化で緑の沃野となる！？カナディアンロッキー

4月29日(金)から5月6日(金)までの、トラピックス「北米大陸三大絶景8日間」ツアーは午後4時発のエアーカーナダで、成田2時集合。10時に近くのスーパーマルエツに紙パック入りの日本酒やつまみ、インスタントみそ汁、ペットボトルのお茶などを買出しに行くことから旅の荷造りを始める。早めのお昼を終え、12時にタクシーを呼び、勝どき駅から都営地下鉄大江戸線で御徒町に向かう。京成電鉄のスカイアクセスなら成田まで30数分、楽勝だと、上野で1時発のチケットを買おうとするが満席。東日本大震災直後の自粛ムードも薄れてきて、海外ツアー客も少しは増えたか？仕方なく次の特急に乗るが、空港着は2時半近く。添乗員に電話すると飛行機も遅れているから大丈夫だという。

多民族国家カナダ、アメリカで何を感じ取るか？左上の奥歯の違和感は気になるが、健康保険に入れない国民が沢山いる「貧困大国アメリカ」(I、II、岩波新書、堤未果)で歯医者を実体験してみるのも面白い。寒さ対策にヒートテックの股引とカシミヤのセーターを持つが、カナディアンロッキーで好きなスキーができないか？五大湖で泳げないか？スーツケースに入ったままの、世界中で一緒に泳いだ海水パンツを思い出す。

カルガリー直行便で、明朝はカナディアンロッキーの雄大な白い世界が眼下に広がる。窓際の席で期待が膨らむ。ニューヨーク経由のペルーツアーで目にした真冬の無人の、広大なカナディアンロッキーの白い風景が目には浮かぶ。地球温暖化が進めばその無人の荒野が緑の沃野に変わるかも知れない。ヨーロッパへの北回り航路で真下に見る、夏でも凍結した大河が、真っ白な雪原に微かに碧の光を放つ、シベリアの凍土地帯も同じだ。地球温暖化の怖さだけが叫ばれるが、寒冷期の氷河の下から現在の北米の大平原の穀倉地帯や一大工業地帯となった五大湖が現れた。本当に怖いのは地球温暖化ではなく、地球の来たるべき寒冷化かも知れない。CO₂でオゾン層が破壊される！なんて人間の自業自得！地球全体のCとOの総量は変わらない。万年単位で繰り返す地球の寒暖で北米の穀倉地帯や五大湖が、ヨーロッパや南米の穀倉が、氷河の下に戻ったら、間もなく90億人を超える人間の食べる物は大丈夫か？想定外と言って、わずか千年前の貞観の大地震並みの大津波に打つ手を持たず右往左往する人間だが、万年単位、億年単位の思考が必要ではないか？

②森と湖とブルーシャトウ

10時間ほどのフライトで、日付変更線を通過、時差15時間のカナダのカルガリーへ、

同じ 29 日の午前 11 時着。夕方 5 時に出発したのに朝の 11 時着。タイムスリップしたような、一日儲かったような不思議な気分だ。途中機内食が二度出たが、航空業界の自由化が進み、安売り競争が激化して以来「食事サービス」は限りなく「餌の支給」に近くなって、旅の楽しみが一つ減った。それでもチャイナエアなどと違って、エアカナダはお酒飲み放題で、飲み助には嬉しい。カナディアンビール 2 本と白ワイン 1 本の睡眠導入剤を楽しむ。見どころてんこ盛り、強行スケジュールのトラピックス（阪急旅行社）らしく、さっそくカルガリー空港から直接カナディアンロッキーへ。トラピックスは体力不足の方にはお勧め出来ないが、同じ時間と費用で見どころを沢山楽しめる。体力に自信があり、好奇心旺盛な方向きだ。

かつて冬季オリンピックが開かれたカルガリー、高層ビルの集中する狭い都心部を抜けると、フェンスで囲まれた戸建住宅街が続く。郊外のオリンピック記念公園のスキー場には、そこだけ雪の残るジャンプ台がある。100 キロ、1 時間半のバス旅でカナディアンロッキーへ。冠雪した標高 3 千メートル級の山々が段々目の前に近づき、石灰岩の山を崩してセメントをつくる工場を幾つか通り過ぎ、リゾートらしいロッジなどが見えて来ると、そこがカナディアンロッキーの入り口、バンフだ。丸太作りの山小屋風のレストランでサンドイッチのお昼。内装にも木材がふんだんに使われ、いい雰囲気だ。地ビールを頼むが、黒っぽいハーフ&ハーフ風、アマダイの好みではない。グラス一杯 7 ドル（700 円）。

カナダを東西に貫くフリーウェイから山道に入り、ヨーホー国立公園へ。バスの行く手に眼鏡橋が見える。あの橋は何でしょう？と現地の日本人ガイド。野生動物の宝庫で、狼や熊、山ライオン、鹿やバッファローなどの通り道を確保するための獣道だという。片側二車線に恰幅するのを機に作っているが、一か所 1 億円ほどかかるので、安くあがる地下トンネル式が多いという。動物愛護のジェントルマンの植民した国らしい。駐車場や公園のゴミ箱も熊に開けられないように把手を工夫してあるが、例年より雪が多いせいかな？水辺で草を食むエルク（大角鹿）を見ただけだった。万年雪を頂く山々からは碧く光る氷河が流れ落ち、エメラルド色の融水を湛える美しい湖が連なる筈なのだが、ただ白い氷原が目の前に広がるのみ。それはそれで心洗われるが、エメラルド湖の白い湖面には土砂が雪崩れ込み、広い湖面の真ん中に緑の針葉樹が横たわる。自然の美しさと厳しさは表裏なのだ。売店も短時間しか開かないとのことで、名勝とは言え、シーズンオフの夕方エメラルド湖の土産物屋は閉まっている。広い国土で労働力不足、移民歓迎の国カナダらしい。クッキング・ホース川が岩を侵食し続けて出来た自然の橋、ナチュラル・ブリッジの急流の水飛沫の白と、淵のエメラルドの絵模様が美しい。

エメラルド湖では、珍しい木製の橋を車も渡っていたが、同じ道をバンフに帰って木造のレストランで夕食。森と湖の国らしく、内装のむくの木目が奇麗だが、鮭のグリルはいささか大味。南限に近い新潟の村上の鮭に比べたら、物はずっといい筈だが物足りない。長旅の末によれよれで帰って来た、傷つき汚れた鮭を、どうしたら美味しく食べられるか？工夫を凝らす村上の人達の努力があれば、素材の良さがもっと生きる筈だが、所詮はフィッシュアンドチップスの国から来た人達だ。南に隣接する国の人達だって似たようなものだと考えて見上げると、「非常口」を英仏両語で表記してある。多人種共生の移民国家だが、フランス語を母語とする人達はケベック州に多い。ケベックの鮭料理は又、違う味がするのだろう。フレンチサーモンはきめ細やかな味がするのかも知れないが、イギリスからの

植民者の末裔が多いこの辺では仕方ないのだろう。あなたはフランス語を母語としていますか？と英語で訊ねると、Yes!と笑顔で返してくれた若いウェイトレスの顔立ちは素敵だが、背の高さの割にはボリュームがある。大味な料理を大量に食するので、体が横にも大きくなるのだろう。異常に太っている男女が多い。この点ではキングズイングリッシュを話すかフレンチかの違いはなさそうだ。川には鮭がいくらでも上がってくるし、ロッキーの彼方、東の広大な大平原では小麦が外国に売るほどとれる。メタボだと言われ、日本では小さくなっているアマダイだが、いささか自信回復。ロッキーに車を走らせ、星空を見るオプションツアーがあるが、長い1日を早く終わらせたい！誰も参加しない。9時近くになっても陽は落ち切らず、暮れなずむ空を背に、名門の古城風ホテル、バンフ・スプリングが目の前に蒼く聳える。

③氷河初体験！足下に300メートル厚の氷が！

バンフ・スプリングはさすが名門ホテル、部屋の大きさ、調度の立派さだけではない。広いバスタブにはちゃんと止水栓がついている。途上国を旅することが多いアマダイは止水栓のないバスタブに水を貯めるために、ゴルフボールに替えてこの頃は、ゴム製の吸盤を持ち歩くが、その出番は当然ない。携帯用ウォシュレットも携行するが面倒で使わないので、途上国へ行くと日本でウォシュレットで甘やかされた尻が、直ぐに鮮血をほとぼしらせる。だが、今回は大丈夫だった。備え付けのトイレトペーパーの差だろうか？レストランや空港などのトイレもきれいで、ペーパーも備え付けてある。

初日の日本人女性ガイドに代わって、二日目は日本人男性がガイド。カナダとりわけバンフは日本人には住みやすらしく、人口8千人の1割が日本人だという。男性ガイドも諸国放浪の末辿り着いたバンフで24回目の五月を迎え、今年は49回スキーをしたという。震災の影響もあり、今シーズン9回しかスキーできなかったアマダイには羨ましい。雪はまだたっぷりあるのに、さすが環境立国、国立公園の制約があってほとんどのスキー場は閉鎖したという。まだ滑れる所があるらしく、ホテルにはスキー客の姿がある。

二日目は8時間かけバンフとジャスパーの2国立公園を巡る。ロッキーの宝石と評されるレイクルーズ。ボウ氷河から流れ出た水を湛え、針葉樹林に囲まれた荒々しい景観が魅力のボウ湖。トランスカナダハイウェイ沿いにあり、夕暮れ時、バーミリオン（朱色）に染まる空を映す湖面が、神秘的に美しいというバーミリオン湖。ガイドブックの写真はいずれも湖面に満々と水を湛えるが、雪景色も又、素敵だ。凍ったボウ湖の湖面に伸びる数本の直線。岸辺のピックアップトラックからスキーを降ろし、ザックを背負い、交互にかかとを上げてスキーを滑らせていく数組の男女。日本人もいる。昔はアザラシの皮を使ったという、合成樹脂製の滑り止めをスキーの裏に貼って、湖面はるか向こうの氷河を登り切り、そこからクレパスや雪崩を避けて勇壮に滑り降りてくる。5月の奥只見丸山スキー場の山頂から、コースを外れて樹間を滑り降りる醍醐味を思い出すが、アマダイは山登りが苦手だ。リフトのあるスキー場がいい。山岳スキーは危険も伴う。雪崩に巻き込まれると上下の感覚がなくなるという。そんな時は口から涎を垂らしてみるのがガイド。涎は下に流れるから、逆の方向に向かって、携行のスcoopで上に脱出口を掘るのだという。

圧巻はコロンビア大氷原。北極圏以南では北半球最大の氷原。ここに降り積もった雪がゆっくりと流れ出てできたのがアサバスカ氷河だ。最も厚い部分で360mにも達し、総面積

325 平方 km。ロッジで昼食の後、シャトルバスに乗り氷河へ。更に人の背丈ほどもある巨大ゴム車輪のついた雪上車に乗り氷河の上へ。かつてはキャタピラーの上にキャビンが載っていたが、キャタピラーが氷河を削るので新しく開発した、ここだけの雪上車だという。ここでもさすが環境立国。積もった新雪を靴で除けると碧の光を放ち氷河の水が現れる。この地点で氷の厚さは 300m。太平洋や北極海から蒸発した水がカナディアンロッキーに遮られて雪となり、押し潰されて氷に姿を変え、気の遠くなるような歳月をかけてここまで辿り着き、碧く光を放って人に感動を与え、間もなく水となって川をつくり、大洋に帰る。一部は天然のミネラルウォーターとして売られ、人の体を潤す。

④バンクーバーはアメリカ領？

同じ道をバンフへ戻る。大橋巨泉経営の OK ショップという土産物屋で再集合して夕食のレストランに行くことになり、取り敢えず解散、自由行動に。移民国家カナダらしく雑多な肌色の人間が行き交うが、大きな尻をした白や黒の肌の巨尻人が多い。雪の消えた街中でスキーを抱え、スキー靴を履いて歩く、巨尻人に比べると子供にしか見えない、中年の日本人カップルに声を掛けると、先週は東北に震災ボランティアに行っていたが、今週はバンフでスキーだという。連邦制のカナダは州ごとに消費税率が違い、石油で潤うここアルバータ州は消費税ゼロだからか？メープルシロップやメープルクッキー、アイスワインなどのカナダ名物を手に一杯抱え、大橋巨泉の店に 16 人のメンバー全員再集合。消費税はゼロだけど、バンフは物価が高いですよという、娘のように可愛い添乗員の込山さんの忠告にもかかわらず、半額セールの特典につられ滅多に土産物を買わないアマダイも Banff の刺繍入り緑のキャップを、ゴルフ用に 9 カナダドルで買う。夕食はアルバータビーフ。同じ大陸だからアメリカ同様、草履のように大きくて固いステーキが出てくるのだろうと、期待していなかったのだが、和牛ほどではないが意外と柔らかく美味しい。地ビール生一杯 7.5 カナダドルとテーブルワインの白 11 カナダドルをいただく。アイスワインはショットグラス一杯分が 18 カナダドルと高く、貴腐ワインのように甘い。

三日目は移動日。9 時ホテル発、カルガリーから 1 時間半のフライトでバンクーバーへ。国内線なので機内食もアルコールも出ないと、カルガリー空港で中華弁当を渡される。ビールが欲しいとビルを徘徊、リカーショップを見つける。アサヒとサッポロプレミアムビールのショート缶が 2.99 カナダドルで、なぜか同じサイズのカナダビールが 11 ドル。久しぶりに喉越しすっきりアサヒスーパードライで喉を潤していると、添乗員の込山さんが、「ターミナルビルでは飲酒禁止です」と言う。今更言われても困る。ビニール袋に入れたまま飲み切る。

エアカナダ機を乗り継いで更にラスベガスへ向かうが、アメリカへの入国審査はバンクーバーですという。アメリカの入国審査官がカナダで、アメリカ入国許可権というアメリカの国権を行使している。かつてはアメリカと戦争もし、併合される危機に晒されたこともある。長年アメリカが経済封鎖をするキューバと今も国交を維持するなど、輸出の八割をアメリカに依存するとは言え、独立国家としてアメリカと一線を画しているカナダ。今や最大の貿易相手国は中国なのに、対米従属を抜けきれない日本に比べると見上げたものだが、自国の領土である空港を他国の領土のように使わせるのは何故だ！「WELCOME TO USA」と書かれた看板の下で靴を脱がされ、両手 10 本の指紋を取られるが、これまでアメ

リカ入国の際、あなたは反米闘争をしたことがありますか？とか、刑務所に入ったことがありますか？との、アマダイの若き日の過去を見透かすかのような厳しい質問に、冷汗かきながらノーと嘘をついていたのだが、今回はそれがなく、バンクーバーでスムーズにアメリカ入国。最近話題の、レントゲンで人間を視透かし、裸にしてしまうという人権無視の身体検査もない。搭乗後飲み物の機内サービスが始まると、前列の客が白や赤のワインを頼んでいる。添乗員の込山さんはラスベガス便も国内線扱いでアルコールは出ないと言っていたのに変だなと思いながらも、カナディアンビールを一缶頼むと、6 カナダドル請求される。現金はノーということでカードで払う。

⑤太陽が小さ過ぎる！グランドキャニオンの夕暮れ

24 時間休みなく動き続けるアメリカ最大のカジノ・シティ、ラスベガス。エッフェル塔やピラミッドを模したり等の、数々のテーマホテルやアトラクションの出現で、今やギャンブルだけの街から、大人から子供まで楽しめる一大リゾート・シティとなっている。宿泊先のモンテカルロホテルでの夕食はバイキング。スロットマシンやルーレット台の間をすり抜けてレストランへ。偶々5月1日はメーデーということで、従業員が少なく、飲み物のサービスが遅い。ソフトドリンクはホテル内無料だがアルコールは有料で、チップ込8ドルの生ビールを2杯ほど飲む。夕食後近くの、滝や庭園が素晴らしい、北イタリアのコモ湖畔の村をテーマにしたリゾートホテル、ベラージオまで夜道を散策、前庭の大きな池の豪華な噴水ショーを楽しむ。度胆を抜く仕掛けが各所にあるが、所詮まがい物で、派手だが薄っぺら、アメリカらしい。レストランもよく見ればファミレスに毛の生えたようなものだ。明日のスターを夢見て路上で楽器を弾いたり、パントマイムしたりのパフォーマーもいる。歩道橋の上などには物乞いも見かける。豊かな国アメリカで貧しいことと、貧しい国インドで豊かなことと、どちらがつかないか？競争が緩やかで全体が没落しつつあるかのような国日本から来た旅行客は、豊かだが弱肉強食で貧富の格差が大きく、貧困層が大量に存在する「貧困大国アメリカ」（I、II、堤未果、岩波新書）の一端を垣間見る。二十歳で革命運動という「賭け事」に人生丸ごと賭けて、見事に「擦ってしまった」アマダイは、麻雀やパチンコ、競馬などの賭け事には一切興味がなく、せっかくのラスベガスだというのにスロットもバカラも体験せず、日本から持参のパック酒を寝酒に、持参の本でカナダを同時進行的にお勉強。

四日目は朝7時にホテルを出発、バスの中の朝食の梅とオカカと鮭のお結びが美味しい。おにぎりを食べ終わる頃には市街を抜け、乾いた砂漠の世界へ。グレンキャニオンまで448キロ、4時間半の旅。道路を走るトレーラーやタンクローリーも国土の大きさに比例してか、日本より長い。所々にセメント工場らしい工場があり、どうにか水を確保できている場所には町があり、巨大なディスカウントスーパー、ウォルマートがある。ウォルマートが出来ればそこで売物をつくる工場が出来、それを運ぶ運送業も興るのだという。幾重にも重なった地層の頂上がテーブルのように真っ平な不思議な風景を居眠り半分で走ると、トレーラーハウスやキャンピングカーに混じって、クルーザーがちらほら。「BOAT STORAGE」と書いた巨大な建物も。なんでこんな山の中に艇庫なのだ？と考えると、蒼い湖が見える。コロラド川が深く刻んだグレンキャニオンにつくられたグレンキャニオンダムが創った全米第二の巨大人造湖、レークパウエルだ。複雑に入り組んだ美しい蒼い湖面には大きなヨ

ットハーバーまであり、白波を残してモーターボートが走る。ここは砂漠の中の貴重な水辺、新しく創られたページの町は自然と人工の織り成す一大リゾートとなった。フーバーダムに次ぐ大きさのこのダムも 1930 年代の大不況時に TVA の一環でつくられたのかと思っただが、1958 年着工、65 年完成で、132 万キロワットの発電能力がある。近くには大きな煙突を 3 本持つ火力発電所もあり、150 キロ離れたところから専用鉄道で石炭を運ぶ。水力、火力発電ともに、ここでつくられた電気は他地域に運ばれる。アリゾナのこの砂漠の居留地に押し込められ、散在して住む先住のインディアン、ナバホ族は隣のユタ州から電力を買うという。

西部開拓時代を思わせる粗削りな木造の内装の、馬具や銃なども飾る居留地のクラブハウスでサンドイッチの昼食後、インディアンの運転するトヨタのランドクルーザーに分乗、砂煙をあげ砂漠の枯川（ワジ）を走り、アンテロープ・キャニオンへ。自然のダムの役割を果たす森と、長年月かけ森が育む幾層もの腐葉土に欠ける砂漠に突然降った雨は、土石流となって低地を流れ下り、気が遠くなるような長い時間をかけ柔らかい地層を削り出し、人間がようやく擦れ違えるくらいの深くて狭い、曲がりくねった峡谷を創り出した。はるか頭上に、砂漠では見かけない流木がひっかかった狭い割れ目からかすかに光がさし、丸く削られた幾層もの地層を照らし出すと、入組んだ壁の凹凸が陰影を創り、火炎土器の炎の色の砂岩が、淡いベールを纏うかの如く濃淡の光を発し円やかにカーブ、生き物のように体をくねらせる。デジカメのファインダーを通し、液晶画面で見るともっと幻想的だ。デジカメを渡すとインディアンの長老が思わぬ角度から更に神秘的な絵を写し出してくれる。長老が笛を奏で、一つまみの砂を放り投げると、砂が砂を誘い、さらさらと岩肌を大きく流れ落ち、瀧を創る。ようやく狭い谷を抜け出て炎の色の壁を見上げると、雲一つない深い蒼い空を背に、小さな花の群れが白く輝く。この深い溪谷で土石流に襲われたら我々の命はどうなるのだ？ 我に返るとよく似た景色を思い出す。ヨルダンのペトラ遺跡だ。数年前出水で 23 人のスペイン人観光客の命が失われたというが、行ったことのない人でも、見たことのある人は多い筈だ。映画「インディジョーンズ最後の聖戦」の舞台だ。あの神殿に至る深い断崖の峡谷シークに似るが、スケールと峡谷の幅と深さでは負ける。ペトラにはケニアで見た、アフリカ大地溝帯から人類の祖先がやって来て、BC8～9 世紀以来人間の営みが行われるが、人の住むほどの広さに欠けるこの峡谷はより神秘的で幻想的だ。

再び夕陽のグランドキャニオンまで 220 キロ、2 時間の旅。荒涼とした曠野を走り続け、広い台地に刻まれた谷が深さを増していく。アマダイが世話人をする NPO 法人・緑の地球ネットワークが緑化活動を続ける、中国山西省の黄土高原によく似た風景だ。急に緑が増え、エルク（大角鹿）が草を食み、松の森が深い浸食谷の眺望を遮るようになるとそこが、数億年に亘るコロラド川の浸食と地層の隆起によって創り出された、全長 460 キロ、深さ約 1600m の巨大なスケールの溪谷、グランド・キャニオン国立公園だ。断崖には赤、桃、橙、茶色など微妙に違う色彩の層が幾層にも重なる。峡谷に突き出た岸壁の上、180 度以上広がる眺望が素晴らしいマーサー・ポイント、岸壁の縁に博物館があり、大きな窓からキャニオンが一望出来るヤバパイ・ポイントを巡る。高所恐怖症のアマダイには時に冷や汗だがやせ我慢、途中のドライブインで 50 ドルで買った牛皮のカーボーイハットを順繰りに被って、断崖に身を乗り出し、記念撮影。峡谷内部へ下るハイキングロードの出発点、ギフトショップやロッジがあるブライト・エンジェルポイントで賑やかに、国際色豊かに

夕陽を迎えるが、モロッコのサハラ砂漠に沈む夕陽、エジプトのシナイ山頂やネパールの山中のロッジの屋上で迎えた神々しい夜明け、葦船が影絵のように滑る南米ペルーのチチカカ湖で迎えた神秘的な朝焼けの感動に比べると物足りない。断崖の巨大さに比べ、その陰に沈みゆく太陽が小さ過ぎ、峡谷全体を真っ赤に燃やすには光が不足しているのか？

⑥重量制航空運賃で肥満追放を！？

五日目はトラピックスらしく朝4時半にグランドキャニオンのホテルを出発、一路ラスベガスへ。バスで483キロ、5時間半の強行軍。どこまでも続く草原に低木がまばらに生え、後方の山から陽が昇ると、白々と夜が明けていく。どこかで見た景色だ！朝の早い野獣を見るためトヨタのランドクルーザーを走らせた、明け方のアフリカのサバンナでのサファリと似る。アフリカでは鹿の仲間のインパラやガゼルが角を立てて軽快に群れて走り、キリンが長い首を伸ばし木の葉を食べ、象の群が目の前を横切るが、ここでは牛が寝そべて草を食むだけだ。たまにエルクを見かけるが、他に野生動物は見ない。7時過ぎ、郊外に小さな空港も持つキングマンという町の、レストラン兼雑貨屋で朝食。木をふんだんに使ったレトロな調度のレストランも地元の人達で賑わい、雑貨屋も面白いデザインの小物で溢れる。ここでもキティちゃんのぬいぐるみが売られている。世界の人気者だ。

キングマンの町を出るとステップから沙漠にかわり、サボテンのピンクの花がきれいだ。緩やかに山を登り始めると完全な沙漠の世界。間もなく右手にフーバーダムが見える。1936年完成で、当時世界最大規模を誇った重力式ダム。高さ221m、有効貯水量367億立方m。グランドキャニオンをはさんで上流でグレンキャニオンダムが、下流でフーバーダムがコロラド川を堰き止める。環境重視の今のアメリカだったら建設できただろうか？3.11後の今なら脱原発のエースとしてもっと期待されたのだろうか？電気の供給が可能になってキンキラ金のラスベガスが築かれ、渴いたロスアンゼルスに水を供給し、大恐慌脱出の切り札とされた。フーバー大統領を引き継いだルーズベルト大統領の一大公共事業TVAの中核に位置付けられたが、大恐慌は結局第二次世界大戦でしか最終的に解決されなかった。核の恐怖の下で世界戦争が不可能になったかに見える今も、貧困と人権の問題は解決せず、局地戦争やテロは絶えない。経済のグローバル化、むき出しの市場競争の激化も進む。9.11後、アメリカのシンボルの一つとしてテロリストに狙われなかと、ダムの入口で厳しい検問が行われ道路が大渋滞、見物車両と分けて一般車両をスムーズに通すためバイパスが建設された。そこに架かる大迫力のフーバーブリッジは日本の大林組が施工した。

フーバーダムがつくったミード湖を横目に走りボルダーの町を通る。ダムの建設作業員はこの町から専用鉄道で工事現場に通った。当時の駅舎と列車が今も残り、町の入口にはカジノの看板。人足寄場のチンチロリンという訳だ。洋の東西、古今を問わない。ラスベガスでは空港のターミナルにもスロットマシンが置いてある。流石だ。トロントに向けエアカナダ機が上昇し、四角に区画された郊外の住宅地も視界から消えると、赤や茶の沙漠を、爪を伸ばした打ち回る藍色の巨大な龍。コロラド川か？お腹と胸のように大きく膨らむのはミード湖とレークパウエルか？幾つものグランドキャニオンが、大地を切り裂く。川が蛇行する遙か北には雪山が見える。カナディアン・ロッキーか？更に東に飛ぶと藍の輝きを失い、土気色をした巨大龍が横たわる。その亡骸は大地の皺のようだ。北の雪山が近くに見えるようになると碧の小さな湖、パッチワーク状の緑や赤や茶の農地の上を飛び

越し、眼下に延々と雪山が続く。これが北米大陸の真ん中より西を北に走り、カナディアン・ロッキーに連なる脊梁、ロッキー山脈か？視界を遮るぶ厚い雲が消えると、見渡す限り緑や黄、橙や茶に塗り分けられた、丸や四角のパッチワーク模様の、果てしない平原が現れる。北米の穀倉地帯、大平原だ。灌漑用のスプリンクラーが弧を描き回れば丸の、縦横に平行に水を撒けば四角い緑のパッチワークができる！水が鍵だが、同じ土俵で日本の農業は相撲を取れない！ドーバー海峡をトンネルで渡って、平坦なフランスの大地を目にした時と同じ感に打たれる。パッチワークを切り裂いて蛇行する大河はミシシッピーか？再び眼下に雲が現れ密度を増す。五大湖の上を飛んでいるようだ。厚い雲を突っ切り、夜8時とは言えまだ明るい雨のトロント空港に降りる。飛行機の席に収まらず、前後の席で肘掛を外して座っていた巨尻族の男と女が、並んで前を歩いている。カップルだったのだ。農地が広大で食糧が安いからと言って、無闇に食べ過ぎるのはいけない。23キロを超えると機内に預ける荷物は超過料金を取られるのだから、航空料金も重量制にすべきではないか？

⑦瀑布を眼前に最後の晚餐

トロントはカナダ最大の都市でオンタリオ州の州都。オンタリオ湖の北西岸に位置し、人口約250万人。様々な国からの移民が作り出した「人種のモザイク」と呼ばれるが、日本人も多い。現地ガイドも若い日本人男性で、冬場は日本に出稼ぎに行くという。空港でカシミアのセーターを重ね着して日本料理屋へ直行。海外で日本料理屋というと、韓国人や中国人の経営で、これが日本料理？と驚くことも多いが、静岡出身の若者が店長で、日本産の若い大和撫子が迎えてくれる。和服にサンダル履きなのはちと情けないが、毎朝手作りするという冷奴を前菜に、アサヒスーパードライで喉を潤す。冷の白鶴片手にコース料理を味わった後、ナイアガラまで百キロを1時間半で走る。

グランドキャニオンのロッジのバスタブには止水栓がなく、持参のゴムの吸盤のお世話になったが、ヒルトンではそういう心配はない。朝、目を覚ますと隣のホテルの屋上越しに、ヴィクトリアの滝、イグアスの滝と並び世界三大滝と呼ばれるナイアガラの滝が水煙を上げる。エリー湖からオンタリオ湖に流れるナイアガラ川にある滝はカナダとアメリカの国境になっている。朝食後、国境に架かるレインボーブリッジをバスで渡り、アメリカ滝へ。どこの国の観光客を乗せているのか分からないが、前のバスの入国審査に時間がかかるが、我々は簡単にパス。轟々と流れ落ちる滝と、水だけでなく大岩や大木も豪快に運ぶ川をアメリカ側から見物、今度は徒歩で国境を渡って戻る。映画ナイアガラ撮影の際マリリンモンローが泊まったという、クラウンプラザの最上階のレストランで、滝を見下ろしながら、フレッシュサーモンのフライの昼食。目の前の公園には染井吉野と枝垂桜と一緒に可愛く咲く。白や黄の水仙、赤いチュウリップも一緒に咲く。運よくその日から運行を始めたという遊覧船霧の乙女号に乗船、薄いビニール合羽を頭から被って、カナダ滝の渦巻く滝壺目がけて、真っ白な水飛沫に飛び込む。原爆は張子の虎だ！と、粗末な装備でキノコ雲に突っ込む、文化大革命期の中国人民解放軍の兵士の気分だ！？所詮根性だけでは放射能は防げず、小舟は渦に翻弄されて上下し、頭や顔、足元はずぶ濡れになる。

滝はゴード島によってアメリカ側のアメリカ滝（最大落差34m、幅260m）と、カナダ側の国境を挟んだカナダ滝（落差53m、幅670m）とに大きく分かれる。米国北部全体が氷河

に覆われていた1万年前、最後の氷河期の後退期に形成され、五大湖の水が大西洋に流れ込む途中にある。滝の高さは余りないが、轟音と水飛沫を上げて流れ落ちる水の量に圧倒される。浸食により年間1mずつ後退し、現在は最初の位置から11km上流にあるといわれる。そのままではエリー湖に埋没してしまうため、この一世紀に渡り人工的に浸食を抑える努力がされて来たが、今なお年間3cm程度浸食が進む。このペースでは2万5千年後には消滅するというが、氷河期が再来、無駄な努力に終わることはないのか？

ナイアガラにも大橋巨泉の土産物屋があり、日本人の売り子相手に買い物。ホテルに帰りプールで泳ぐ。カナディアン・ロッキーでは滑れなかったが、ナイアガラでは遂に泳ぐ。シャワーを浴びてから、ホテルの近くのレストランで滝を眺めながら最後の晚餐。トラピックスのハードな旅を六日間も続けると16名のメンバーもすっかり仲良くなり、アマダイより十歳上、福山から夫婦で参加の最長老、電設資材販売会社の森脇社長に乾杯の音頭を取って頂き、賑やかにチキングリルで最後の晚餐。楽しかった旅の終わりを祝福するようにナイアガラに七色の虹がかかり、同じく福山から家族で参加の、大正町歯科院長の岡本さんに一本メをして頂き、無事に主要旅程を終える。翌朝9時15分発でトロント空港に向かう前に、前日車中から見た、日本では見たことのない美しい木蓮の花の並木をどうしても見たい！前夜ライトアップされて妖しく輝いていたのに、今は又、豪快に水飛沫を上げる滝の脇を小走りを見て、ようやく木蓮の花の並木をカメラに収め、車中の人となる。